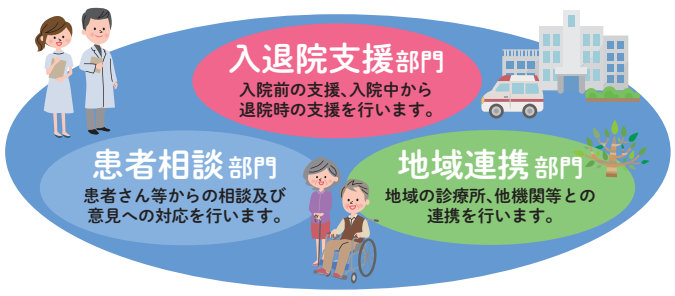
阪大病院NEWS
No.85号
OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL
2022(令和4)年1月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15
TEL／06-6879-5111(代表)
ＱＲコードから本院ホームページをご覧いただけます
https://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

患者包括サポートセンターがスタート

入院前から退院まで



患者包括サポートセンターの3部門体制
Patient Support Center／患者支援中心／환자종합지원센터

一貫した支援のため体制充実

本院は「入院前支援から退院支援への連続的な体制づくり」を重点課題として掲げており、その取り組みの一環として令和4年1月1日、「患者包括サポートセンター」を新設しました。当センターの稼働により、患者さんは、入院前の外来受診に始まり、退院後の治療継続まで、包括的な支援を受けることができます。

楽木宏実センター長

疑問や不安にひとつの窓口で対応

本院はこれまで「保健医療福祉ネットワーク部」において、入院患者さんの支援に努めてきましたが、入・退院を一貫してサポートできる体制の充実と、地域医療との連携強化をめざし、業務を当センターに移行しました。

当センターは「患者相談部門」「入退院支援部門」「地域連携部門」の3部門で構成。「患者相談部門」は、治療や看護、社会福祉制度、その他お困りごとなどに関する、患者さんからのご相談に対応し、医療職・福祉職・事務職などの多職種が情報を共有し、解決に向けて尽力します。

スムーズな入院 不安のない退院

センターでは、これまでどおり地域の医療機関やかかりつけ医などから紹介された患者さんに、本院での受診予約を行います。「入退院支援部門」では、入院の前に現在服用中の薬剤や生活の様子などについて伺い、必要に応じたサポートを行います。事前に診療のための準備を整えておくことで、患者さんは速やかに適切な入院治療や看護を受けることができます。

また、退院後に継続治療が必要な患者さんに対しては、地域医療機関への転院支援や、在宅医療の調整、手配を行います。生活面の課題に対しては、社会的な支援制度を紹介するなど、患者さんの暮らしやご家族の意見などを尊重しながら、不安のない退院に向けたサポートを行います。

医療内容継続のため地域医療機関と連携

「入退院支援部門」が早期から患者さんに介入し、自宅療養や施設への退院や他の医療機関への転院を見据えた入退院支援を行うことで、「地域連携部門」は在宅医療の診療所や医療機関、福祉施設、各自治体などと迅速に連携できるよう各機関との窓口になります。患者さんは退院後も安心して、連続した医療や福祉制度を受けることができます。

当センターには、医師・看護師・ソーシャルワーカー・臨床心理士・事務職員及び他部門の専門職など多職種が関わっており、それぞれの分野の専門性を駆使し、チームとして患者さんを支援しています。入院前から退院まで患者さんに寄り添い伴走しますので、本院の診療に関する悩みやお困りのことがありましたら、遠慮なくご相談ください。

入院前支援で看護師が患者さんと面談している様子

薬剤部門システムを全面更新しました

～高度な薬物療法を安全・安心かつ効率的に提供～

令和4年1月の電子カルテ(病院情報システム)の入れ替えに合わせて、薬剤部門システムも全面的に更新しました。薬剤部門システムは電子カルテと連動し、機能を余すことなく活用することが求められます。薬剤部門システムが古いままではフル活用できないため、今回は電子カルテと薬剤部門システム・調剤機器の同時更新を実現しました。

薬剤部門システムは、医師の処方を解析し、必要な情報を付加することで、薬剤師による調剤をサポートする大事な役割を担っています。新しいシステムでは処方内容をより適切に判断することで、薬剤師の業務をよりきめ細やかにサポート出来るようになりました。また、高度なスキルが必要な粉薬の調剤も自動調剤ロボットにより効率化され、今後は薬剤師が患者さんや医療スタッフへの情報提供や処方相談により多くの時間をかけられるようになると期待されます。さらに、今回のシステム更新を機に内服薬の包装形態(シート、一包化などのこと)を見直すことになり、3月以降は患者さんに最適な形態で調剤する運用に変更予定です。薬剤部はこれからも患者さんへより安全かつ安心な薬物治療の提供に努めます。

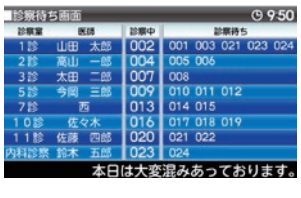
散薬調剤ロボット

外来診察でのメール呼出サービス 開始

外来診察の待ち時間対策の一環として、令和4年2月1日より外来待ち合いの診察待ち案内盤に外来基本カードの番号が表示されると、患者さんの携帯電話にメールでお知らせするサービスを開始します。外来基本カードに印字されたQRコードを携帯電話のバーコードリーダーで読み取り、表示された宛先にメールを送信することで、呼出システムに登録されます。スマートフォン、フィーチャーフォン(ガラケー)どちらでも対応可能です。これにより、診察までの待ち時間を外来待ち合い以外の場所でお過ごしいただくことができます。なお、このサービスは診察待ち案内盤を導入している診療科のみ対象となりますのでご了承ください。登録方法の詳細は各科外来受付に置いてありますチラシをご確認ください。

1 外来基本カードのQRコードを読み取り、登録

2 診察待ち案内板に番号が表示されると



3 携帯電話にメールでお知らせします

患者用駐車場からの歩道整備について

令和7年運用開始予定の「統合診療棟」の建設工事が始まっています。工事期間中は、騒音や工事車両の通行等、ご不便とご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力のほどよろしくお願いします。

患者用駐車場までの歩道に、動物などのトリックアートを設置しましたので、通行の際はぜひご覧ください。また、移動用車いすや休憩所がありますので、ご利用ください。

なお、公共交通機関にて来院可能な方は、混雑緩和のため、モノレール・バス等をご利用いただきますよう、よろしくお願いします。

新型コロナウイルス感染症対策について

ブースター接種の意義

新型コロナウイルスワクチンの3回目となるブースター接種が日本でも昨年12月から始まりました。現時点では2回目の接種から8ヶ月以上経過している方が対象となりますが、自治体によっては流行状況などを勘案して6ヶ月以上経過している方も対象になります。

そもそもなぜブースター接種は必要なのでしょうか。mRNAワクチンは接種後しばらくの間は高い感染予防効果が確認されていました。しかし、この感染予防効果は時間とともに低下してしまうことが明らかになってきています。ファイザー社のmRNAワクチンは接種から半年経つと感染予防効果は20%前後にまで落ちてしまうと言われています。一方で、重症化を防ぐ効果は半年経過しても保たれていると報告されていますが、60歳以上の高齢者では重症化予防効果も落ちてくることが分かってきています。

1回目よりも2回目の方が副反応が強かったので、3回目はもっと強いんじゃないかとご心配されている方も多いと思いますが、海外からの報告では2回目の副反応とほぼ同等のようです。本院の患者さんにおかれましてもぜひ積極的にブースター接種をご検討ください。

クラウドファンディング挑戦中
コロナ禍でも、がん専門医療人(がんプロ)の養成を継続したい！
がん専門医療人(がんプロフェッショナル)育成のための文部科学省補助金が一旦終了します。教育の継続が危機的状況です。是非、ご寄附を賜わりたく、よろしくお願いいたします。
お問合せ先　阪大拠点がんプロ事務局(全国がんプロ協議会事務局)
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘1-7
大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻　内
TEL:06-6879-2472　FAX:06-6879-2629
https://readyfor.jp/lp/osaka_univ/
詳しくはこちら

ホスピタル ミニ・ニュース

PHOTO TOPICS

病気と闘う子どもたちへプレゼント！

昨年12月23日(木)、小児医療センターではサンタ回診が行われました。サンタやトナカイに扮した本院の医師たちが、チャリティーイベント「Osaka Great Santa Run 2021」、及びNPO法人ジャパンハート様等よりお贈りいただいたクリスマスプレゼントを入院中の子どもたちに届けました。

衆議院議員総選挙等不在者投票を実施

会議室に設置した不在者投票所

国政選挙・地方選挙の実施に際し、本院は不在者投票施設として指定を受けており、入院中の患者さんは院内で投票を行うことができます。

令和3年10月31日(日)に執行された衆議院議員総選挙等については、27日(水)を不在者投票日とし、院内会議室及び各病室にて、延べ131名の患者さんが投票されました。

今後もお住まいの市町村等に関する選挙が入院中に実施され、院内での投票をご希望の場合は、ナースステーションを通じ本院総務課庶務係までお問い合わせください。

動画で病院見学会

NEW 更新しました！

大阪大学「ワニ博士」

ドクターヘリ編 ▲

新型コロナウイルス感染症対策のため、2年連続で市民見学会の開催を見送ることになりました。そこで、見学会に代わる新企画として本院職員が撮影した動画を順次公開しています。普段はなかなか見る事が出来ない本院の裏側や取り組みを担当者による解説などで紹介いたします。今回は、新たに「ドクターヘリ編」を追加しましたので、是非ご覧ください。

こちらからご覧ください

ご協力のお願い

「阪大病院データバンク」

近年、人工知能(AI)を用いた医療機器・診断支援・医薬品の研究開発は欠かすことのできないものとなりつつあります。そのような開発では多くの診療情報を民間企業、行政機関、他の研究機関と共用して進める必要が出てくることがあります。

「阪大病院データバンク」は、診療情報を広い範囲での医学研究及び医薬品・医療機器等の開発・商品化のために利活用することについて患者さんにご理解いただいたうえ同意署名をいただき、その後、情報公開や拒否の機会を確保する等を通じて信頼関係を築き、研究開発を推進することを目的としています。令和3年10月18日から消化器外科外来を受診される患者さんを対象に開始し、令和4年1月からは循環器内科外来、その後順次対象診療科を広げています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

https://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-aim/databank/

紹介動画もご覧ください

眼科

あらゆる目の病気に最善の治療

初診で全ての検査実施

大学病院の眼科の多くが一つの分野を得意とする中で、当科はあらゆる目の病気に対して最善の治療ができる体制を組んでいます。

これは、一般外来しかなかった昭和30年代後半に全国で初めて複数の専門外来を置き、それぞれの分野で治療技術の向上や人材育成に努めてきた伝統です。スタッフの陣容が厚く、手術件数は全国トップレベルの年間4000件以上を数えます。複数の目の病気をわずらう患者さんにもチームとして最良の治療を提供しています。

専門外来は大きく分けて「角膜」「網膜」「緑内障」「斜視・神経眼科」「眼炎症」の5部門があります。

角膜は目の表面の組織で、さまざまな病気があります。当科は角膜移植に力を入れてきたほか、再生医療にも取り組み、iPS細胞を世界で初めて臨床応用しました。

網膜は目の奥にあり、光を感じる神経が密集しています。網膜硝子体手術は当科で最も多い手術です。眼科手術の技術は革命的に進歩し、顕微鏡を使って小さな傷で済ませられるようになりました。短時間の安全な手術で視力の回復が見込めます。また、失明した患者さんに人工的な装置である「人工網膜」を埋め込む研究も進め、5年後をめどに実用化を目指しています。

緑内障も目の奥の神経の病気で、網膜の病気と合わせて失明原因の上位を占めます。診断技術の進歩により、どの部分が傷んでいるか断層撮影で見られるようになりました。現在、人工知能(AI)を病気の進行予測に活用しようとしています。

当科での初診は、当日に全ての検査を行い、治療方針を決定するところまで終えます。このため、病院にいなければならない時間が長いと感じることがあるかもしれません。しかし、検査を後日に回すと心配が長く続くことにもなってしまいます。1日で済ませるという当科の方針をご理解ください。

高度救命救急センター

「一人でも多くの命を救う」

24時間体制で重症者受け入れ

織田順高度救命救急センター長

高度救命救急センターはあらゆるけがや病気で重症となった救急患者を24時間体制で受け入れています。緊急処置を行う初療室とCT検査室が一つになった「MD-CT一体型初療室」の他、救急専用の集中治療室20床など迅速な診断・治療ができる設備が充実。センター長を含めスタッフ26人が「一人でも多くの命を救う」「あきらめない」決意を胸に日本トップレベルの治療研究と技術に基づいた救急医療に取り組んでいます。

既成概念にとらわれない先駆的な診断・治療技術の開発にも挑み続けています。近年、感染症に臓器不全を合併した敗血症では「5人に1人亡くなる」とされ、致死率をいかに下げるかが世界的な課題になっています。当センターは本学医学系研究科の研究室と連携し、敗血症の病態メカニズムを明らかにし将来の治療薬開発につなげる研究に取り組んでいます。新型コロナウイルス感染症についても遺伝子解析を積極的に進め病態解明を目指しています。

年間1000件超

当センターは本院が大阪市の中之島にあった昭和42年に日本初の重症救急専門施設「特殊救急部」として開設され、大阪府の三次救急医療施設として年間約300人の重症救急患者を受け入れていました。吹田移転後の平成13年には高度救命救急センターの認可を受けました。傷病比率は外傷3割、疾病6割、その他1割となり、令和2年の重症受け入れは年間1026件にのぼり、これには重症新型コロナ症例も含まれます。

平成20年、大阪府の委託を受け大阪府ドクターヘリの運航を開始し、年間約150件出動しています。隣接の京都府の一部もカバーするとともに、和歌山県、奈良県、滋賀県とは応援協定を結び、これらの県からの要請にも対応しています。平成23年の東日本大震災への派遣をはじめ、災害対応でも大きな役割を果たしています。令和2年にドクターカーと、災害派遣医療チーム(DMAT)が使用する災害時用緊急自動車DMATカーを導入し、これらの運用のために救急救命士3人を採用しました。令和3年10月末までにドクターカーは517件出動。DMATカーはワンボックスカータイプの車両で、令和2年に発生した熊本豪雨災害への医療支援を目的に本院のDMAT隊員が出動しました。

当センターは大阪市と北摂地域で地域に根ざした救急医療を目指し、また最先端医療機関として地域から広域まで最適かつ迅速な救急搬送体制づくりの中核を担ってきました。今後もさらに体制強化に取り組みます。

国公私立大学附属病院

医療安全セミナーを開催

日本航空株式会社
和田　尚氏

「令和3年度国公私立大学附属病院医療安全セミナー」を、令和3年6月29日に開催しました。本セミナーは、全国の大学病院に所属する医療安全の専門家らに最新の知見を紹介するため、文部科学省の後援のもと平成16年から大阪大学が毎年主催しています。今年度もオンライン開催となりましたが、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、事務職員など、計631名と昨年度よりさらに多くの参加登録がありました。

今年度のプログラムでは、「新たな視点がもたらす医薬品の安全」「Person-centered Careのかたち」として、多職種地域連携やSafety-II理論を取り入れた医薬品安全対策、患者の力を引き出すピアサポートなど、医療の質・安全の新しい取り組みを紹介したほか、「レジリエンスの要素を取り入れたエアラインパイロット訓練」についての講演がありました。また、「COVID-19対応にみられるレジリエンス2021」として大阪府における先行的取り組みの経験から得られた様々な視点からの学びを共有しました。参加者からは、レジリエントな組織をつくるためのポイントや教育手法等について、自らの組織で活かせる知見を多く得ることができたと大変好評でした。

事務部長おすすめ御膳

メニュー
- 煮込みハンバーグ
- カニ入りコールスロー
- コンソメスープ
- 御飯
- スイートポテト

～秋の洋風ディナー～

昨年11月30日の事務部長おすすめ御膳は、煮込みハンバーグがメインの洋風ディナーを提供しました。その中でもコールスローは山腰俊昭事務部長からリクエストがあったカニを使用して贅沢に仕上げました。患者さんには「テンションが上がった」「豪華でうれしい」と好評でした。さらに小児食では子ども達に喜んでもらえるよう、ハリネズミのスイートポテトを手作りしました。これからも入院患者さんに食事を楽しんでもらえるよう、取り組んでまいります。